

令和 6 年度 8 0 2 0 公募研究事業
研究報告書抄録（採択番号 24-5-13）

研究課題：歯の喪失のリスクファクターとなる口腔状態と口腔機能の検討

研究者名：村上和裕，堀 一浩，長谷川陽子，佐藤直子，大川純平，兒玉匠平，吉村将悟

所 属：新潟大学大学院医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野

【緒言】成人における歯の喪失の一般的な原因には齲蝕，歯周病，歯根破折が挙げられる．歯根破折は，咬合時などで過度の機械的負荷がかかることで生じるが，齲蝕や歯周病においても過度の機械的負荷が強く関与することが近年の報告が明らかにしている．したがって，咬合力などの“力”に関連する口腔機能は歯の喪失予防において重要と思われるが，歯の喪失のリスクファクターとして着目した研究はほとんどない．

本研究は，定期的に歯科メンテナンスを受診する高齢者に対し，口腔状態と口腔機能を経時的に評価することで，歯が喪失しやすい高齢者の特徴を明らかにすることを目的とした．なお，令和 6 年度は歯の喪失を多く経験する口腔状態や口腔機能の傾向を後ろ向き調査により明らかにすることとした．

【方法】新潟大学医歯学総合病院総合診療科および義歯診療科において継続的に歯科メンテナンスを受診している 65 歳以上の健常高齢患者を対象とした．対象者の基本的な全身状態（年齢，性別，既往歴など）に加え，口腔状態として，歯周組織検査，咬合支持分類（Eichner 分類），根管治療の既往，補綴装置の設計，抜歯部位およびその理由の記録を行った．さらに，当院の診療録を最大 12 年前まで遡って歯科治療に関する治療歴を閲覧し，過去の口腔状態の記録を行った．口腔機能は，最大咬合力を口腔機能低下症の検査に準じて評価した．過去の診療録で最初に歯科メンテナンスに移行した日をベースラインに設定し，本研究の調査を実施した日をフォローアップとした．そして，Eichner 分類別に抜歯本数と口腔状態および口腔機能の関係を Spearman の順位相関係数を用いて評価した．また，抜歯理由別に抜歯になった歯の特徴をカイ二乗検定および一元配置分散分析を用いて比較した（ $P<0.05$ ）．

【結果】202 名の患者の同意を得て口腔状態と口腔機能を評価した．このうち観察期間が 5 年以上の診療録が保管されている患者 148 名（男性 55 名，女性 93 名，平均年齢 76.2 ± 7.5 歳，平均観察期間 123.4 ± 28.9 か月）および抜去歯 186 本を分析対象とした．Eichner B 群では咬合支持数（ $r_s=-0.227$ ）が，Eichner C 群においては，最大咬合力（ $r_s=0.497$ ）が抜歯本数と関連があった．また，歯根破折により抜歯を経験した対象者は，それ以外の理由で抜歯になった対象者よりも有意に高い最大咬合力を示し，対合歯が存在した割合が有意に高かった．抜歯になった歯種で割合が高かったものは，Eichner A 群は大白歯，Eichner B 群では小白歯，Eichner C 群では前歯と，Eichner 分類により抜歯のパターンが異なることが確認された．

今後も，対象者を新たに募集するとともに，縦断的調査を行い，より詳細に歯の喪失のリスクファクターを検討していく予定である．